



が県庁で開かれ、優秀賞の5人、入選の5人に表彰状が手渡された=写真。優秀賞のうち、中央審査で多良間中3年の山川梨緒さんが

優秀賞（水の週間実行委員）
「『生きる』につながる『水』」と題した山川さん

ら56編の応募があった。また、中央審査には、各都道府県の地方審査を経た18編の応募があった。

（文・写真）

執筆者と読者交流

OISTなどで
初イベント実施

7日にも開催

本紙教育面で連載中のコラム「未来へいっぽにほ」の執筆者と読者が触れ合った初めての特別イベ

ントが7月31日、沖縄科学技術大学院大学（OIST、恩納村）と県立埋蔵文化財センター（西原町）であつた。多くの親子連れなど、OISTでは雄アリ研究者の吉村正志さんとアリの観察、埋蔵文化財センターでは高校地理教諭の神村智子さんと貝のアクセサリー作りに挑戦する参加者=7月31日、西原町の県立埋蔵文化財センター

を明らかにしたかった」と中学教諭から研究者に転身した経緯や、米国滞在中に研究費を稼ぐため路

本紙連載「未来へいっぽにほ」

上でギターを持って歌つたことなどを軽妙なトークで説明した。その後、参加者は中庭に出てアリを探した。「あちこち動き回らず、じつと見るのがこつ」と吉村さんからアドバイスを受けて、植え込みのそばやコンクリートの通路にしゃがみ込んだ参加者ら。ル

ーペをのぞいて、みんなで合計6種類ものアリを見つけ「みんな形が違う」「このあとでかまれていたんだ」と目を輝かせた。

埋蔵文化財センターでは、神村さんが約2千年から2200年前の弥生時代の「貝の道」について説明した。



上：教育面のコラム「未来へいっぽにほ」の特別イベントで、吉村正志さん（右手前）とアリを観察する参加者ら=7月31日、恩納村の沖縄科学技術大学院大学。下：貝のアクセサリー作りに挑戦する参加者=7月31日、西原町の県立埋蔵文化財センター

「沖縄の貝を求めて九州の人があたくさん沖縄にやってきた。遠くは北海道でも沖縄産の貝が見つかっている」と話した。

その後、参加した親子は、貝を使つたアクセサリー作りに挑戦。先史時代と同様に石で貝に穴を開け、ひもを通してネットレスやストラップを作つた。

子どもたちは穴を開ける作業に苦労しながらも、貝を並べたり、ビーズをあしらつたりして、出来上がつたアクセサリーに満足そうな表情を見せた。

コラムを執筆するおきなわ「非行」と向き合う親たちの会（さんぽの会）世話人代表の井形陽子さんは5日、水球チーム・沖縄フリッパーズ監督の砂邊昭利さんは7日に開く。7日のみ申し込み可能。問い合わせは琉球新報文化部

☎ 098（865）5162。

の水資源を見つめ直し、大切にする心が大事だと訴えている。その他の県知事表彰の受賞者は次の通り。

【優秀賞】

知念凜（与勝3年）「水の